

# あとがき

令和2年度の『富岡製糸場総合研究センター報告書』をこうして刊行することができた。平成21年度に『富岡製糸場のお雇い外国人に関する調査報告』を上梓して以来、11冊目の富岡製糸場総合研究センター報告書となる。

今井の報告は、旧葦塚製糸場の解体工事の際に発見された文書を読み解いたもので、明治初年の食事を知る上でも興味深いものである。富岡市では、令和2年3月に各分野の専門家による『富岡製糸場女性労働環境等研究委員会報告書』を刊行したが、執筆者の中に食文化や食物史を専門とする委員がいなかったため、この分野に関して触れることができなかった。衣食住は、人が生活していく上での基礎であり、明治初年の献立に注目した本論考は、女性労働環境等研究委員会報告書を補完する点でも価値あるものとなっている。

腰塚の報告は、「世界遺産条約履行のための作業指針」の中で戦略目標の一つとして位置づけられている人材育成に関わる富岡市の取組を紹介したものである。旧富岡製糸場セミナー・ワークショップの修了者の中には、富岡製糸場をテーマに論文を執筆した者や卒業・修了後に世界遺産や文化財保護に関連した職業に就いた者もいると聞いている。こうした点においても所期の目的を達成している有意義な事業であると言えよう。

結城の報告は、三井呉服店から原合名会社への事業譲渡について、富岡製糸場に遺された原富岡製糸所等の帳簿を用いて考察したものである。人材、取引先及びノウハウの3つの視点から両社の間での事業譲渡が円滑に行われたと推測している。原合名会社に関する資料が極めて少ない中、貴重な資料を用いての報告となっている。

木内の報告は、富岡製糸場で開発され、原経営期の大正時代後半から片倉経営期の昭和16年まで稼働していたTO式多条繰糸機に関するものである。同機の設置年代や設置場所について考察するとともに、御法川式繰糸機との仕様の相違から高品質生糸の生産のために開発された機械と位置づけている。これまで明らかにされることのなかったTO式多条繰糸機の実態に迫る論考である。

伊藤の報告は、昭和28年から昭和31年に至る献立表を中心に、経営側の資料のみならず労働組合機関紙や元従業員への聞き取り調査の成果を重ねて克明にまとめている。普段の食事だけでなく富岡製糸場内で行われた様々な行事の際に提供された特別メニューについても触れている。明治初年の献立表に関する今井の報告との比較という点でも興味深い論考となっている。

末筆となるが、本報告書が世界遺産登録の際に諮問機関である国際記念物遺跡会議から示された課題の解決の一助となるとともに、多くの方に活用いただければ幸いである。

令和3年3月

富岡製糸場総合研究センター 所長

結 城 雅 則